

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

第 61号 2007.6.19

発行
北海道ポーランド文化協会
〒011-0029
札幌市北区北29条西12丁目2
-16
佐光伸一
電話・FAX 011-727-1520

ちよつと振り向いたら…

アグニエシユカ・ポヒワ

夜十時になった。ただいま寮の部屋にいる私のだが、何を書こうかなと必死に考えながら、パソコンの画面を睨み付けている。グラフの考察だらけの文章表現の授業が嫌いなせいなのかわからないが、硬い文章を書くのが嫌いでたまらない。もともと怠け者の性質なので、書き始めることこそが難しい。よっしゃ、頑張ろう。

私がポズナン大学の日本学科の留学生として札幌に来てからちょうど八ヶ月。そこで、留学するという経験について個人的な思いや考えを大雑把だが、簡単にまとめて、短い感想文を書くことにした。では、さっそく始めよう。

去年の夏、日本に行く前に、せつかくの一年間の留学だから、より充実した楽しい日本での生活

を送ろうと決意した。その気持ちをお忘れずに、日本に来てから「可能性を眠らせるな!」という言葉をもットーにしている。「遊びながら、勉強する」という方針。学校の先生側から見ると、いい考えではないかもしれないが、私はこれが一番いいアイデアだと強く思う。

札幌に来て、はじめて経験したことがたくさんある。

小学校の時のスケートの授業以来、ここに来てはじめて、ウィンター・スポーツを味わった。スノーボードをやり始めたのをきっかけに、心が広がって親しい友人と考える人と出会った。スキージャ

ンプ競技もはじめて生で見た。アダム・マリシユが世界チャンピオンになった時の嬉しさといったら

留学生のために行われるイベントには、のがさず参加しようと思っている。様々な人と接触ができ、日本文化も楽しめた。餅をつく、三味線や琴のコンサートを聴く、よさこいソーラン祭りです踊る、ボランティア活動や先生のお宅での餃子を作る会に参加するなど、はじめてやってみたことが全てが楽しかった。

普通に友達と一緒に食へに行くことも楽しいし、パーティーやカラオケなども、いい思い出になる。





旅行が大好きな私は、時間とお金に余裕さえあれば、あちこち行ってきた。八月に始まる夏休みには、大規模な旅行をしようと考えているので、今から夏休みが待ち遠しい。

もちろん、普段、いくら楽観的に考えようとしても、困ったり、悩んだりすることはたくさんある。例えば、日本語がその問題の一つだ。時々、「日本語がまだまだ下手だ。どうすればもっと上手になれるのかなあ？」と友達に聞くことがある。「だって充分話せるよ！」という答えを出す人はもちろんいる。ところが、充分話せ

ると言われても、私は嬉しくない。なぜかというところ、自分の気持ちを表したい時、本当に大事で言わなければいけないことを言いたい時に、言葉が足りないからだ。当然落ち込む。だが、いくら落ち込んでいても何にもならないから、そういう時こそ勉強に本腰を入れようとする。

そろそろ夏が始まる。八カ月があつと言う間に過ぎた。この八カ月間をまとめてみようとするれば、「盛り沢山」と「忙しい」というのがびつたりの言葉だと思う。これからもチャンスを見逃さないように留学生の生活を楽しもうと思っている。

ポーランド面白ニュース

一九年の昏睡から覚めると市場経済
ポーランド男性

二〇〇七年六月四日

ワルシャワ（ロイター） 民主化前のポーランドで事故にあい昏睡状態に陥った男性が、一九年ぶりに意識を回復した。男性は、家族の看病に感謝すると同時に、様変わりした政治や経済に目を丸くしている。同国のメディアが二日、伝えた。

男性は、ジャン・グルゼブスキーさん（六五）。一九八八年に事故で昏睡となり、当初は余命二、三年と診断された。

入院中は妻が献身的な看病を続けた。「一九年間、床ずれを防ぐため毎時間姿勢を変えるなど、経験豊富な集中治療チームがすることをしてきた」と、医師は夫人を称賛。グルゼブスキーさんも「命を救ってくれたのは妻だ。このことは決して忘れない」と地元テレビに語った。

グルゼブスキーさんはまた、「昏睡に陥ったとき、商店には茶と酔しかなかったし、肉は配給

だった。ガソリンを入手するための長い列が至るところにあった」と、記憶にある旧体制下の状況を語り、「それが今は、人々は携帯電話を手に行き交い、店にはものすごい数の品物があり、目が回りそうだ」と話した。

グルゼブスキーさんの四人の子どもは、昏睡だった間に全員結婚し、一人の孫が誕生している。昏睡中に家族が話しかけてきた記憶がうっすらあるという。

<http://www.cnn.co.jp/fringe/CNN200706040008.html>

シリーズ・ポーランドの映画監督
第二回 「ヤン・ヤクブ・コルスキ

その二

トマシュ・スタシンスキ

魔術的リアリズム

「ひとは神秘的空間を創造する能力を自分の中に持っている。それを発見し記述する能力を身につけねばならない。」

魔術的リアリズムとはかなり単純化して言えば、文学ジャンルのひとつであり、それは三次元の歴史的現実には置かれた出来事や登場人物に対し、超越的、超自然的あるいは非日常的次元を与える。従ってたとえこの魔術的リアリズムの中に奇蹟や呪いあるいは亡霊が現れるとしても、それをファンタジーやホラーと混同してはならない。

魔術的リアリズムが最も盛んだったのは南米であり、ガブリエル・ガルシア・マルケスやアレホ・カルペンティエルなどの作家の作品においてである。しかしコルスキはこのスタイルをポーランドの土壤にみごとに移植した。つ

まり土着の信仰や民衆の伝統そして独自のカトリック理解をあまりにもみごとに利用したので、彼の映画はポーランド的なるものの真髓となつている。コルスキは「ヤン・ヴォードニク (Jan Wodnicki)

映画においてもそしてその後の劇場映画においても、自分が創造した世界を守り続けた。そして批評家はその世界のことを「ヤン・ヴォードニク」あるいはただ「コルスキの映画芸術」(Kino Kolski)と呼んだ (Kino Kolski と Kino Poisk (ポーランド映画)の言葉遊び)。

この時期の二本の作品はコルス



キの創作にとって最も特徴的であると同時に、日本の観客にとっても興味深いのではないかと思える。

「奇蹟の場所」

「神は悪魔によって償われねばならない。この映画はそのことを物語っている。わたしはいつも自分の作品を、わたしを取り巻く世界の中に位置づけようと努めている。」

そのような作品の第一号となつたのは一九九四年作の「奇蹟の場所」である。簡単に言うと、これはカトリックの若い司祭がポピエラーヴィ村の小さな村教会の現実と衝突することに関する物語である(ポピエラーヴィ村はコルスキが数年間幼年時代を送つた場所であり、自分の映画の大部分の舞台となつている)。この作品はさまざまレベルで受容することが可能である。たとえばポーランドでは、この神父と地元の軽薄なウエイトレスとの恋という筋が論争を呼んだ。というのもここでは

ポーランドの教会を道徳的にそれほど健全ではない形で表現しているからである。自分に対し敵対的な環境の中に自己のアイデンティティと成長とを求める神父の個人的なこころの迷いと同時に、コルスキは罪と罰をめぐる超自然的な筋にも力を注いでいる。この村はタイトル通り、奇蹟の場所であることが明らかとなる。この村には普通は神の恩寵と理解されるような現象あるいは何かの予兆が湧き出る泉のようにあふれている。映画の途中でわれわれは気付くのは、「ヤン・ヴォードニク」でのように、この村が罪つまり戦争中に流された血によって汚されており、過去がまるでカルマの悪あるいは呪いのようにそこにしかかかっているということである(カルマとはヒンズー教の概念であり、コルスキはその影響を受けている)。その結果、この映画にただよう魔術が由来するは、一神教の神なのかあるいは悪魔なのかそれとも村の住民が普通信仰する異教の神々なのかは明らかではない。コルスキ自身は実際に教会に通うカトリック信者であるにもか

かわらず、彼の作品の中には懐疑への信念を伝えたり、今日までポーランド文化の中に残る熱いキリスト教と異教的儀礼との混交を強調したりしているものが多くある。したがってこの作品はポーランド文化に深い根を持つにもかかわらず、日本の観客はこれらの作品の中に自然における異種混交の世界という光景を目にする。そこでは日本の神のような異郷の神々とキリスト教の信仰が同居している。

「奇跡の場所」はヨーロッパ的な映画ではなく、むしろ日本のスタイルに近い。つまりそれはハリウッド映画のなはつきりした結末を持たず、見るものに対し開かれている。

訳：佐光伸一

第五二回例会

二〇〇七年二月一七日に北海道ポーランド文化協会第五二回例会として「ポーランド料理教室」デザート篇」が開催されました。当日は一八名の方が参加されました。おなじみの講師エディータ・ジェプカさんにポーランド風のチーズケーキとアップルパイの作り方を教えていただき、その後は美味しく出来上がったケーキをいただきました。これからも定期的に料理教室を開催する予定ですので、その際には皆さんぜひご参加下さい。当日作ったケーキのレシピを掲載しておきますので、ぜひチャレンジしてみてください。



☆ポーランド風チーズケーキ

材料

卵 四つ

カッターチーズ 五〇〇グラム

砂糖 四分の三カップ

バター 小さじ二分の一

片栗粉 小さじ山盛り

ベーキングパウダー 小さじきり

もり一杯

バナラエッセンス(数滴)

レーズン 小さじ二杯

一、バターを溶かす。二、レーズンに熱湯をかけ、柔らかくする。

三、卵から白身をとiriわけする。白

身をミキサーにかける。四、黄身

と砂糖をミキサーにかける。それ

に少しづつバター、片栗粉、ベー

キングパウダーとバナラエッセ

ンスを加える。次にカッターチー

ズを加え、最後につぶした白身と

レーズンを加え、丁寧に混ぜる。

五、一七〇度の温度で二時間焼く。

表面が焦げないようにするため

に、焼き上がりの二〇分前にケー

キをアルミホイルでくるむ。

☆ポーランド風アップルパイ

○リンゴの部分

・りんご 四個

・水 一〇〇ミリリットル

・砂糖 小さじ三杯

一、リンゴの皮をむく。細かく切

り、鍋に入れる。水を加え、ふた

をして一〇分間煮る。二、砂糖を

加え、混ぜながら、蒸発して水が

なくなるまでさらに煮る。冷ま

す。

○生地

・マーガリン一〇〇グラム

・砂糖小さじ三杯

・バナラエッセンス(数滴)

・ベーキングパウダー小さじ一杯

・卵一個

・黄身一個

・小麦粉一、五カップ

一、材料を混ぜ生地を練る。それ

を四分の一と四分の三に分ける。

大きいほうを伸ばし、型に入れ

る。二、生地にフォークで穴をあ

ける。リンゴの部分を上のにせ

る。生地の小さな部分から、上に

のせる飾り部分を作る。

三、一八〇度の温度で三〇分焼

く。

第五一回例会 「敬愛なるベートーヴェン」上映会
協賛 シアターキノ

「第九」とアンナ、そしてポーランド派ホルント ② 三浦 洋
作曲家を志す女性、アンナの魅力

さて、今度は二つめの、アンナを描いた映画という見方についてお話をさせていただきます。おそらくアンナはまったく架空の女性ですが、映画の中ではとてもリアリティのある存在です。とくに忘れられないのが、ベートーヴェンがアンナに対して「女が作曲するなんて犬が逆立ちして歩くようなものだ」というシーンや、アンナが「私は乳母や掃除婦や売春婦によくまぢがえられる」と叫んで、悔しさを訴えるシーンです。作曲の才能をもったアンナにとって、女性がさげすまれる社会状況は耐え難いものであり、この映画の随所にフェミニズムのまなざしを感じられます。実際、クラシック音楽の歴史の中では、マーラーの妻アルマやメンデルスゾーンの

② 三浦 洋

姉フアンニーなど、作曲の才能を持ちながら女性であるゆえに認められにくかった、といわれています。日本でも作家、幸田露伴の妹・幸田延が困難な人生を歩んだといわれています。しかし、この映画は決してフェミニズムを声高に叫ぶ作品ではなくて、アンナの姿は理想化されていません。アンナは作曲家になりたいと願いつつも生き方に迷い、なかなか主体的に人生を切り開いていけません。そんな彼女の姿にもどかしさを覚える方もおられると思いますが、私はここに、ホルントがポーランドの映画監督クシシュトフ・ザヌーシから受けた影響を感じます。ザヌーシの映画たとえば「太陽の年」や「巨人と青年」には逆らえない運命の中に生きる人物たちが出てきますが、このようなザヌーシ的な視点をホルントは保持しつつ、アンナに限りない共感をこめて描いているように思います。

少々話が難しくなりましたが、私はダイアン・クルーガー演ずるアン

ナという女性が実に魅力的に感じられます。アンナはドイツ人という設定ですが、知的で誇り高く、勤勉で、しかもチャームिंगな彼女こそポーランド人女性の典型にみえます。ポーランド人に比較的多い「アンナ」という名前が彼女に与えられていることにも起因するかもしれません。

ここで、キュリー夫人を挙げますと、彼女はポーランド人で、本名をマリア・スクウォウドフスカといいます。大変勤勉で魅力的な女性だったそうで、私にはアンナとキュリー夫人ことマリアがだぶってみえます。たまたまこの一カ月ほど新聞に「ポロニウム」という物質がまるで毒薬のように書かれていますが、この「ポロ」というのはポーランドのことです。発見したキュリー夫人ことマリア・スクウォウドフスカが祖国ポーランドにちなんでつけた名前なので、ポーランド人びいきの見方をしますと、貧困の中で研究にうちこみ女性として初めてノー

ベル賞を受賞したキュリー夫人の姿こそ、ホルントがアンナを造形した遠いモデルになっている気がします。

そのいみで、この映画は女性監督のホルントが女性の誇りを描いた映画といえます。ホルントは「太陽と月にそむいて」(一九九五) という作品で詩人ランポーとベルレーヌを描きましたので、芸術家をあつかった作品という点で連作にみえますが、今回のストーリーはヒロインのアンナにかなりの比重がありますので、そこが違いといえます。

ホルントのポーランド派らしさ

さて、ホルントの映画という三番目の見方に移りますと、アグニエシカ・ホルントは長らく脚本家としてポーランド映画の巨匠アンジェイ・ワイダとともに作品を世に送ってきた人です。たとえば「ダントン」(一九八二)、「ドイツの恋」(一九八三)、「悪霊」(一九八七)など、「連帯」運動でポーランドが注

目されていた八〇年代の作品がそうです。ポーランドはシヨパンに代表される音楽の国であるとともに映画大学をもつほどの映画の国でもあり、カヴァレロヴィチ、ポランスキ、キエシロフスキ、ザヌーシなど名立たる映画監督を多数輩出してきました。それは、ポーランドがルネサンス以来、演劇を発展させてきた国であり、名優を生んできた歴史が映画に受け継がれているからです。シヨパンが学んだ音楽学校も前身は演劇学校の音楽部門でしたので、ポーランドでは、演劇を母とする映画と音楽は双子の生まれということになります。

ホラントはハリウッドやフランスでも映画を制作している人ですが、ポーランド派の映画監督だと実感される理由がいくつかあります。一つは先ほど運命論の話をしましたザヌーシからの影響です。ザヌーシの「巨人と青年」という作品では老作曲家と音楽学生が夢を通して不思議な出会い方をしますが、どこ

かベートーヴェンとアンナの出会いに似ていますので、「敬愛なるベートーヴェン」のヒントになっているのかなという気もします。また、状況を想像させながら登場人物をうつしだしていく手法はワイダの映像を想起させます。

このようなことからホラントをポーランド派の映画監督と考えますと、一つ興味深いことがいえます。それは、ポーランド人がドイツの芸術家ベートーヴェンをたたえた作品をつくったということですが、一見なんでもないことのようにですが、ご承知のように第二次世界大戦はナチス・ドイツがポーランドに侵攻したときから始まったわけですが、それ以前の歴史においてもポーランドはドイツから侵略を受けていましたので両国の関係は歴史的には良好でありません。ベートーヴェンの「第九」にしても、ナチスが国威発揚の機会に好んで演奏した音楽でした。したがって、ベートーヴェンやドイツをたたえるのはポーランド人にとってタブーのような雰囲気があり、私の知る範囲でも、たとえば

シヨパンがベートーヴェンやシューベルトから影響を受けていることを主張するのはタブーのような雰囲気があります。シヨパン研究にはあります。それを考えますと、ベートーヴェンを描いたこの映画はポーランド派にとって画期的でもありません。

ちょうど今年にはドイツでノーベル賞作家のグンター・グラスがナチス親衛隊に属していたことを告白し(八月二日)、元ポーランド大統領のワレサ氏がグラスの「ゲダニスク名誉市民」称号剥奪に一時動いて話題になりました。グラスの母親はポーランドの少数民族カシューブ人で、映画にもなった「ブリキの太鼓」にはポーランド人が登場します。グラスの例が示すように、隣の国でありながら複雑な関係を持つポーランドとドイツを念頭におきますと、この「敬愛なるベートーヴェン」は、少し大げさですが、両国の今後の関係を予感させる作品なのかもしれません。

もう一度、話をワイダに戻しますと、ワイダとホラントの関係は、ちょうどベートーヴェンとアンナの関係に重なっても見えます。アンナが「私はベートーヴェンに仕えているのではなく、共同制作しているのです」と誇らしげに語るせりふは、ホラント自身のせりふとして受け止めるとき実感がこもっています。

何よりも、ホラントがワイダやポーランド派の流れをくむ監督であることを示す映像が冒頭にてできます。それは、「白い馬」です。ワイダのファンの方ならすぐに、あ、あの白い馬だ、とすぐ気づかれると思います。古くはワイダの名作「灰とダイヤモンド」にも、そして「一番新しくは「パン・タデウシ物語」にも出てくる白い馬が「敬愛なるベートーヴェン」にも出てきます。この白い馬はポーランドの象徴で、ホラントは意識的に冒頭で白い馬を使い、ポーランド派として名乗りを上げていくのにちがいません。

ポーランド旅行 珍道中 第二回

浜谷千里子

友人が大学生だったこともあり、高校時代の友達を集め何度かパブでパーティーを開いてくれました。確か三度目のパーティーの時、それまでとは違うメンバーが集まり私が日本人だと知ると、彼等はカウンターに私を呼び「カミカゼ」というアルコールを用意してくれました。ショットグラスが一〇個並び中にはキレイなブルーのアルコールが入っています。この「カミカゼ」は五人で二つのショットグラスを一気飲みするの

だったので、「一緒に日本語で話したい」と私にとつて何よりも嬉しいことを言ってくれます。そこで簡単な日本語を教えたかったけれど、それどころではありません。昼は夏のように暑くても夜は寒い。まして夜中の一時の寒さの厳しさは耐えがたいものです。一刻も早く帰りたいかたけど皆の盛り上がりつつある様子を見てみると「帰りた

私を知っているポーランド人なら私がどんなイタズラをするか簡単に想像が出来ると思います。普通のイタズラではありません。暴露話を聞いている皆の目がまん丸になった事は一生忘れられないでしょう。友人の暴露話は止まらないので最初は「チーホー（静かに）」「ザムクニイシエン（黙って）」といつては皆が私のポーランド語に「ブラボー!!!」と絶賛してくれましたが最後に「世界の中心で愛を叫ぶ」じゃな

いけどりネック（市場）の中心で禁句を叫び大爆笑になり誰よりもビックリしていたのはほかならぬ友人でした。私は友人が知らない間にすでに禁句の数々を教えるもらっていたのです。

友人の暴露話には本当に参りましたが、パブでは全て御馳走になつていたので自分が飲んだ分を返そうとすると、何とパブの店長さんは他のお客さんと飲んでいるうちにすっかり酔ってしまい私達の注文したものは途中から半額になつていたことを聞き、日本では考えられないことだけにビックリしました。ちなみにこのとき仲良くなつたメンバーの何人かは独学で日本語を勉強して覚えた日本語を書いて今現在でもメールなど送ってくれます。

そして友人は忘れることなく、しっかりと私にイタズラの仕返しをしてくれました。また、友人と一緒にグデينياに住む別の友人宅に訪問した際、まさに私がカルチャーショックを受けたときでもありました。クラクフからグデينياまで約8時間電車に乗り、視力の良い私は外の

景色を見ながら線路脇にやけにゴミが落ちてるのが気になりました。電車の窓は上から開けるようになっていきます。ポーランドの人々はわざわざ立ってまで窓からゴミを捨てるのかなあ?と思つたほどです。

そのうちトイレに行きたくなつた私はトイレに行き、用を済まし足元にあるペダルを踏むと水が少ししか出なかつたので今度は強く踏んでみると自分の目を疑つてしまいました。トイレの底がパカッと開き、その穴から見えたのは線路上に敷かれている石だったので、同時に私が気になつていたゴミが何であつたかを知り、強い衝撃を受けました。

それまで何度かレストランで間違つて男性用のトイレに入りビックリされた私でしたがあまりにも強烈です。動揺を隠しきれない私に友人が言つた一言。「ここはポーランド」

長かつたようで短かつたポーランド旅行も終わりに近づき、荷物の問題が生じました。捨てるものは捨て、送るものは送り、それでも重量オーバーでしたが、スーツ

ケースは制限を守り、残りのものは機内持ち込みのキャリーバッグに詰め込みました。このとき、私は迂闊にも「爪切り」を一緒に入れてしまったのです。そんなことも忘れ帰路に。空港に着き飛行機の手続きをする前にセキュリティチェックがあり、何も言われることなく出国カウンタから出て自分の乗る飛行機のゲートの前に着くと、たくさんの軍の兵隊がいます。見るからに怖いなんてもんじゃありません。そこで再度セキュリティチェックが行われ、「爪切り」が原因で引っかけたとは思えない私はしきりにポーランド語で話す兵隊に「英語で話してください」というと、一人の兵隊が私のバッグを台の上に載せました。呑気な私は彼が私を持ちやすそうにバッグを台の上に載せてくれたと思い「どうもありがとう」とお礼を言うといきなり大声で「OPEN」。突然の事でロックを解除するのにも慌ててしまいます。やがて原因が「爪切り」だと分かり、英語で説明すると通じないのでジェスチャーで難を逃れましたが恐怖の数分間で

した。そして兵隊は壁に張ってある機内持ち込み禁止の用紙を私に見せ、指でなぞりながら「ねっ、こういう物はダメだよ」とジェスチャーで教えてくれましたが、ポーランド語で書かれている用紙だったので何も分かりませんでした。

こうして私の一ヶ月間の旅行は何かとハプニングだらけでしたがポーランドへの興味は薄れるどころか強くなる一方です。また訪問出来る機会を待ち望んでいる毎日です。

余談ですが、私を知っているポーランドの友人たちは私が民族衣装が大好きなのを知っています。幸いなことに滞在中、クラクフの民族衣装を見て記念写真を撮ってもらえる場所に巡り合った私は喜んで写真を撮ってもらいました。そのために二〇〇ズウォティ(約八四〇〇円)位払いました。金額に関係なく私にとって大切な写真です。ところがその写真を見た友人たちは皆、大爆笑。ある友人は私の知らないところでホームページ上に載せる程です。未だに何故そんなに爆笑されるの

か分かりませんが、ここ数年はその写真をコピーしてプレゼントして笑わせています。



編集部よりのお知らせ。

皆さんも「ポーレ」に原稿を投稿してみませんか? 「ポーレ」ではポーランドに関する皆さんの原稿をいつでも大歓迎です。ポーランドに旅行した際の体験、ポーランド人との出会い、ポーランドに関するさまざまな蘊蓄などをぜひお聞かせ下さい。詳細は事務局までお問い合わせ下さい。

《郵便振替口座》

02740 - 5 - 19735

北海道ポーランド文化協会

普通会員 (年額) 3,000円

維持会員 (年額1口) 5,000円

学生会員 (年額) 1,500円

会費の納入はお済みですか?

2007年度 (2006年 10月~2007年 9月分)

当会は、皆様からの年会費によって運営されています。上記の年度分の会費の納入を宜しくお願いいたします。

「ポーレ」編集委員会 越野剛・小林美保・佐光

伸一・鳴神雅史・ラファウ・ジェプカ

(事務局)

〒001-0029 札幌市北区北29条西12丁目2-16

コーポラス阿部7号 Tel/Fax 011-727-1520 e-

mail: ssamitsu@hotmail.com

《会費振込銀行口座》

北洋銀行 大通支店

(普) 301-0605084

北海道ポーランド文化協会

事務局長佐光伸一

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 61 号 (2007 年 6 月)

目 次

アグニエシュカ・ポヒワ 〈エッセイ〉「ちょっと振り向いたら…」	1
ポーランド面白ニュース	2
トマシュ・スタシンスキ 〈ポーランドの映画監督 2〉「ヤン・ヤクブ・コルスキ (2)」	3
〈第 52 回例会〉ポーランド料理教室～デザート篇 [2007.2.17] [報告]	4
三浦洋 〈第 51 回例会〉『敬愛なるベートーヴェン』上映会 (協賛: シアターキノ) ～ 『第九』とアンナ、そしてポーランド派ホルント (2)」 [報告]	5
浜谷千里子 「ポーランド旅行珍道中 (2)」	7